

岡山における朝鮮通信使の足跡

尹 芝 惠

はじめに

朝鮮通信使研究において、岡山県の牛窓は宿館にあてられた本蓮寺と唐子踊りが残る重要な土地である。また、池田家文庫の「東照宮御祭礼記」によると、現在の岡山市内においても、東照宮の祭礼の神輿渡御行列に正保3（1646）年から組み込まれた町方練物には当初より「唐人踊」が登場した。この直前の寛永13（1636）年と寛永20（1643）年にはそれぞれ第四回と第五回の通信使が来日しており、いずれも日光東照宮に参拝している。このことから、岡山の「唐人踊」も朝鮮通信使の来朝が東照宮の威光によるものであることを示す意図があったと言われている⁽¹⁾。にもかかわらず、岡山県下において、牛窓以外の地域には通信使にまつわる逸話がほとんど残されていない。臨時の寄港地であった下津井⁽²⁾においてさえ同様である。

そもそも岡山は、桃太郎と関連づけられる温羅⁽³⁾にまつわる伝説が残るなど、古代から朝鮮との関係が深い土地柄である。『日本書紀』の「雄略紀七年条」には、6世紀における百済と新羅の抗争に対する百済救援軍派遣に際して、吉備の首長である上道氏が大きな役割を果たしたこと、それにともなって朝鮮から技術者集団が渡来し吉備の地に定住するものがあったこと、また瀬戸内海の水産・水運集団の首長である吉備海部直が朝鮮との通行に際して直接その衝に当たるといふ外交官的役割を果たしていたことを示す記事がある⁽⁴⁾。

本稿では、こうした古代からの朝鮮とのつながりに注目して、岡山と朝鮮通信使との関わりについて、従来の朝鮮通信使研究とは異なる視点から考察を進

めたい。第一に、牛窓に関して、従来の朝鮮通信使研究では取り上げられてこなかった問題について考える。第二に、岡山県倉敷市連島にある宝島寺と朝鮮通信使との関わりについて考察を進める。その目的は、まずは従来の通信使研究からこぼれ落ちていた新資料を明るみに出すことにあり、次にはそれらの資料的価値を推し量ることにある。

これまでの朝鮮通信使研究では扱われなかった問題について新たな角度から意見を提示し、今後の学会での活発な議論を呼び起こしたいと考えている。

1. 牛窓と朝鮮通信使 ― 抹消される歴史・変容される歴史

本章では、朝鮮通信使研究において欠かすことのできない牛窓について検討し、これまでの研究では扱われなかった問題を積極的に取り上げてみたい⁵⁾。

まず、従来の研究によって明らかにされてきた牛窓の性格を概観しておこう。現在の岡山県瀬戸内市牛窓町は、朝鮮通信使が往復で合計十四回寄港した土地である。正使・副使・従事官の三使だけが上陸宿泊した場合もあれば、一行全員が上陸宿泊した場合もあった。また船中泊で誰も上陸しない場合が二度あった。上陸宿泊をした場合には、本蓮寺が宿館にあてられた。そのため、本蓮寺には現在も通信使にまつわる品が残されている。

これらの品々と並んで、通信使研究において注目されるのは、紺浦疫神社の秋の祭礼で奉納される「唐子踊」である。この踊りは現在では、享保元年(1719)に来日した第9回の通信使の製述官であった申惟翰が著わした『海游録』に登場する「小童対舞」の記述などに基づいて、朝鮮通信使の影響を受けたものとされている⁶⁾。

しかしながら、この「唐子踊」は、以前は神功皇后の三韓征伐の伝説に結び付けられ、神功皇后が連れ戻った俘虜の子供らの踊りだと説明されてきた。たとえば、刈屋栄昌著の『牛窓風土物語』(牛窓郷土研究会、1958年)においては「腰掛石」に関して、「紺浦町役場前の路傍に在る。神功皇后が此の石にお腰をかけさせられて、三韓から連れ帰られた童子に舞を舞わせて御覧ぜられた

旧蹟である。其の唐子踊は素盞鳴尊神社の祭典の際に、今尚行事の一つとして奉納されている」(35頁)と記されている。現在でも「唐子踊」は疫神社の社殿で二回踊られた後、地域内の天神社、薬師堂、神功皇后腰掛石の三箇所まで一回ずつ踊られる。わたしの聞き取り調査においても、地元酒造メーカーの関係者が「自分が幼少の頃は、〈唐子踊〉は神功皇后と関係があると教えられた」と述懐していた。また、「唐子踊」が奉納される疫神社それ自体が「素盞鳴神社」を正式名称とする⁷⁾ことも興味深い。このスサノオもまた『日本書紀』巻一において「新羅の国に降降りまして、曾戸茂梨の処に居しまして」⁸⁾と、朝鮮とのつながりが描かれる神だからである。なお、『日本書紀』のこの記事をもとに、幕末期には国学の分野で、〈素盞鳴=檀君〉説が登場することにもなる⁹⁾。神功皇后や素盞鳴の神話ないし逸話が残っているということは、牛窓が古くから朝鮮とのつながりをもつ土地であったということの証なのである。

また歴史的に見ても、牛窓はおそくとも四世紀後半から、重要な港湾として土地の有力な首長の支配管理下におかれ、朝鮮への門戸である筑紫と近畿とを結ぶ瀬戸内航路上の中継基地として機能していた。牛窓に素盞鳴や神功皇后にまつわる神話や伝説が数多く残っていることには、牛窓が古代からの港町という性格を有していることが影響を与えているだろう。事実、沖合いの黒島からは新羅または伽耶の土器が出土している。あるいはまた牛窓には「師楽」の地名が残るが、その海は「新羅邑久浦」と呼ばれた¹⁰⁾。古代から朝鮮との関係が深く、様々な逸話が残っているからこそ、むしろ歴史を如何様にも変容させることができたのであろう。

広島県福山市の鞆に関しても同様のことが指摘できる。鞆も朝鮮通信使の寄港地であり、宿館にあてられた福禅寺には正徳元年の通信使の李邦彦の「日東第一形勝」の書を扁額にしたものが残る。この鞆もまた古代から「潮待ち」の港として知られ、万葉集には八首の歌が残る。また、『魏志倭人伝』に登場する「投馬国」の推定地の一つでもある。この鞆においても、[1] 出雲で大蛇を切ったスサノオが備後に下り、荒ぶる神々を平定しながら海外に到達し、鞆から舟で南海に出、再び還って国土を経営し、後に出雲に入った、[2] 神功

皇后が熊襲平定のために筑紫に向かう際、軻において海神を祭り渡海の平安を祈らせた、[3] 同じく神功皇后が三韓征伐を終えての帰途、武具である軻を奉納した、[4] 百済の王仁が千字文を携えて来日した際、備後の国司が武内臣和多利という部下に、王仁一行を慰労なく接待することを命じ、軻の津へ出向させた、等々の朝鮮と関連する神話や伝説が残る。軻では、素盞鳴と神功皇后に加えて王仁⁽⁴⁾の逸話までもが残っているのである。

牛窓も軻も、古代から朝鮮との通行の要衝地であった。そのため、朝鮮に関連するさまざまな逸話や伝説が残された。おそらく、日本を韓国・朝鮮に対して上位に位置づける必要が生じた際、これらの逸話を編纂するかたちで、「唐子踊」の起源は意図的に神功皇后に結びつけられたのであろう。つまり、歴史の変容が行なわれたのである。

なお牛窓に関しては、このように歴史を変容する動きとは反対に、歴史を抹消しようとする動きがあったことにも目を向けなくてはならない。本蓮寺での聞き取り調査で明らかになったことであるが、太平洋戦争の最中、憲兵隊の人間が本蓮寺を訪れて、朝鮮通信使が残した墨跡や陶磁器の提出あるいは破壊を求めたという。おそらく、朝鮮が先進文化を伝えたこと、またそれらの遺物それ自体が価値あるものとして保管されていることが、抹消すべき歴史と考えられたのであろう。現在、本蓮寺には通信使にまつわる数多くの品が残されているが、当時の住職がいわば命がけで縁の下や床下あるいは庫裏の奥深くに隠し、守り抜いたものであることに、歴史の重層性を感じずにはいられない。

2. 連島（宝島寺）と朝鮮通信使 ― 創造される歴史

岡山県倉敷市連島は、もともとは高梁川河口の島であり、古代より海上輸送の中継地として発展した。それゆえ、この地でも古くからの朝鮮との通行が確認される。そして連島にある宝島寺には、通信使との関わりを示す文物が残されている。しかし管見によると、これらはいまだ朝鮮通信使研究において詳しく取り上げられたことがない。本章では連島と朝鮮とのつながりを概観すると

共に、宝島寺に残る朝鮮通信使にまつわる文物を紹介し、検討を加えたい。

(1) 連島の性格 — 朝鮮との関係を中心にして

上述したとおり、連島は海上輸送の中継地であった。永正の頃には三宅国秀という海賊が活躍した。国秀は永正13（1516）年に、琉球渡航のため薩摩国坊津に十二艘の船舶を率いて停泊中に、島津氏の襲撃を受けて殺害された、と伝えられている。国秀は「和泉守」を官途としており、当時、琉球貿易の拠点であった堺の町衆である三宅氏との関係が指摘されている。加えて連島を含む備中国は幕府要職にある細川氏一族の所領でもある。このことから、国秀は堺商人、あるいはその背後の幕府の意向で琉球へ向かい、その途上で島津氏によって討滅されたのではないかと考えられている⁽¹²⁾。連島の三宅氏が堺の三宅氏と関連があるとすれば、『新撰姓氏録』に「三宅連 新羅王子天日杵命之後也」との記述がある三宅吉士との関連も考慮しなければならないだろう。というのも、吉士は海上交通の要路を管掌し、対外交渉に専従した船頭、水手集団であったからである。また、連島の三宅氏に関しては、『寂巖和上著作集 第一集』に「児島三郎高德の裔なり」とある。この児島高德もまた、『西源院本太平記』に、天之日矛の後裔である今木三郎備後守範長の実子と記されており、新羅系の渡来人の末裔である可能性が高いと言われている。連島もまた海上輸送の重要な拠点であり、だからこそ古代から朝鮮との関わりが深い土地なのである。

(2) 宝島寺と朝鮮との関わり

①古代から中世まで

宝島寺は、真言宗御室派の準別格本山で、寺伝では貞観元（859）年に創建されたと伝えられている。所蔵文献資料中には、中世の年号を持っていたり、中世のものと推測される仏典、聖教類が約九十点含まれている。これらの奥書に記された地名には、和泉、紀伊、讃岐、安芸などが見え、瀬戸内海を通じた文化交流の一端がうかがえる⁽¹³⁾。

この宝島寺には寺域内に朝鮮塚と通称される古墳がある。宝島寺東古墳と宝

島寺西古墳の二基である。このうち宝島寺東古墳は倉敷埋蔵文化財センターが1994年に調査し、その結果、長さ7m以上、幅1.9m程度の横穴式石室を持つ古墳であることが判明した。また、そこからは須恵器高坏1点、鉄族1点、刀子1点、金環2点などが出土した⁽¹⁴⁾。古墳の作られた時期は7世紀初頭と推定されている。

また、宝島寺には麻布著色三蔵幀画一幅が伝わっている。これは、高麗時代以降の地藏十王信仰に釈迦三身信仰の結びついた、朝鮮時代独特の仏画である。さらに、同じく朝鮮系の仏画として地藏十王図があるが、こちらは地藏菩薩に大きな補筆が入っている⁽¹⁵⁾。

日本と朝鮮は古代より通行通商があったが、中世になると室町幕府や多くの守護大名あるいは禅宗寺院などが、交易や文化的接触のネットワークを作ってきた。これらの仏画も船泊りの提供の過程で、連島の宝島寺にもたらされたものと考えられている。連島に宝島寺にも、牛窓や鞆のような伝説や逸話はない。しかし、むしろ古代からの朝鮮との繋がりを残す遺物がしっかりと残っているのである。

②寂巖と朝鮮通信使

寂巖は元禄15（1702）年に備中足守藩の安富家に生まれ、明和8（1771）年に倉敷の玉泉寺で没した。悉曇の研究家としても、また能書家としても知られている。九歳で出家し、備中国浅口郡の普賢院超染律師に師事し仏性戒・両部灌頂を受けた。その後諸国を遊学して梵学を特に熱心に学んだ。元文元（1736）年に京都御室五智山蓮華寺に入り曇寂に師事して醍醐法流の印璽を受け、さらに和泉国家原寺で具支灌頂を受け、宝暦10（1760）年に長谷寺常明から地藏院流の秘奥を受けた。その一方で、自らも備中国宝島寺を中心に密教を布教し、多くの悉曇関係の著作を残した⁽¹⁶⁾。

この寂巖が遺したと言われる『松石餘稿』⁽¹⁷⁾には「宝暦十四年申正月十二日朝鮮信使学士寄」と題する以下の五言律詩が記されている。

韓客跨長天 繫舟吾日邊 非維□代□ 何膽善鄰賢
 名拾越□貴 文以趙壁傳 恨如雲裂散 送迎幾山川

また、宝島寺に残る『日東通歴』の「寛延元 戊辰」の頁の余白には「七月 琉球人 海舶来」という記述と「朝鮮信使 三員 四月 連嶋海上」という記述が併記されている。寂嚴は四十四歳から六十四歳までの間宝島寺の住職を務めたと言われており、寛延元（1748）年に来日した第十回の通信使とは時期的に重なる。だが、文献上に寂嚴が第十回の通信使と接触を持ったとの記述は見られない。

寂嚴と朝鮮通信使との関わりについては、間接的なものではあるが、第十一回の通信使との接触が渡辺知水著の『僧寂嚴』において確認できる。そこには、宝暦14（1764）年の第十一回の通信使が帰国に際して艀に宿泊した折、寂嚴は法弟寂津を使者として自分の書と団扇三柄を贈ったことが記されている。その記事を以下に引用しておく。

日本国備中州都羅島矢上山宝島寺僧寂嚴，曩考朽邁未俱草腐，聞殊方勝会
 大礼者百順神馳歛滿周旋罔己，謹修書使弟子僧寂津侯賓館，奉上土產白団
 扇三柄朝鮮国三使君大人閣下，以珍敬希代之壯觀不腆方物恐招慙覩於遼豕
 矣，私衷之所表扇仁風於三伏不日見

貴国夏雲之奇峰万祥是祈，凝思絶遠山河麗人物美近臨如見，山僧安禪之暇，
 曾游乎墨戲，因奉所書草字六枚輕贖

三大人電覽伏希被

貴国陛下之大明，嚴抱戰慄之懷，不敢獲己也，非是聊銜投瓦礫欲得崑崗之
 碎玉，勿罪惟幸雖有層溟之隔善隣義篤必賜柔遠之惠，永為弊林之榮
 帰朝之日請附吾国禪林五山泰斗之望夢寐不正

諦光爰照奉啓不宜謹言呈上

三使君大人閣下

日本宝暦十四年夏五月中浣 僧寂嚴 稽首

これに対して、使臣の謙泉⁽¹⁸⁾から返簡があったらしく、寂巖はさらに次のような文章を残している。

宝曆十四年朝鮮信使謙泉，贈詩於予山庵，書自邦云東華，乃知毫端之勢，不下於彼所云中華，於是不欲見更人謏劣之詞華，所以余之憤々不得已，非如仗徒之代人報怨，欲使彼暴惡之情狀，不蔓延，可畏人，知之，厭如瘡癩，掃如塵芥，本業此邦之教，除力周孔之学，則山河自此一新，是希

明和元年甲申七月 寂巖記

寂巖は荻生徂徠が中国に傾倒し、中国を中華と呼び、日本を東夷と呼んだことに憤りを感じ、徂徠を不忠不義の人と評したが、ここでも朝鮮通信使の謙泉が自国を「東華」と自称していることに憤っている⁽¹⁹⁾。

寂巖が直接使臣と面会したという証左はないが、間接的にはあれ使臣と接触を持ったことが読み取れる。

③宝島寺に残された朝鮮通信使と関係のある資料

I. 扁額「矢上山」

宝島寺の山門には、「矢上山」《図1》という扁額がかかっているが、これには「朝鮮 金啓升」の署名《図2》がある。

金啓升は号を真狂といい、第十回の通信使に副使の伴侗として随行した。莫逆の友であった画家の崔北の画⁽²⁰⁾や、同じ第十回の通信使における画員であった李聖麟（号蘇齋）の『寿老人図』（李元植蔵）に賛を残している。また、篠山藩家老松崎観海と寛延度の製述官朴矩軒らとの筆談唱和『来庭集』にもその名が認められる。大阪歴史博物館の辛基秀コレクションには詩書五絶が収められている。

扁額としては彦根市磨針峠の旧茶屋に「望湖堂」の文字が残されている⁽²¹⁾ほか、『通航一覽』巻111には東京の浅草閻王堂に「閻王殿」の扁額を残したという記事がある。なお、李徳懋『青莊館全書』巻49の「耳目口心書二」には「金

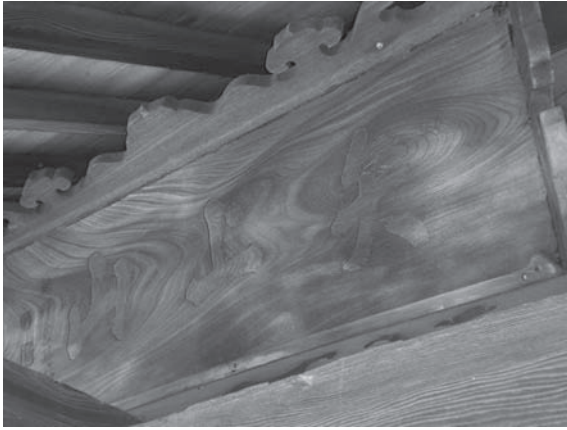


図1 扁額「矢上山」

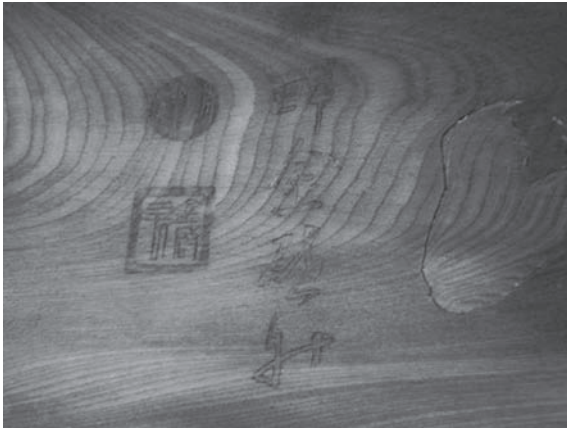


図2 扁額「矢上山」(部分)

真狂啓升」にまつわる記事があり、「日本正殿之額」の文字が見える。李元植は『『通航一覽』にいう「閩王殿」扁額をさすのかもしれない⁽²²⁾と指摘するが、この寛延度の使臣らは多くの唱和集や書画を残しており、いまだ発見されていない扁額である可能性もある。

II. 掛軸「雲山煙雨」《図3》

号は愧石ないし槐石であろうか、名は李金谷と読むのだろうか。いずれにせよこれらの名前ないし号は、朝鮮通信使の随行員の名や号を含む詳細な資料を網羅した李元植の『朝鮮通信使の研究』（思文閣出版、1997年）でも確認することはできない。しかし、だからといってこの作品を贗物だと断じることはできない。朝鮮通信使においては毎回約四百人の随行員が来日したが、三使や随



図3 掛軸「雲山煙雨」

行画員など位階の高い人物に接触できる人間は日本側でも限られていた。にもかかわらず、日本では庶民に至るまで外国の器物に対する関心が高かった⁽²³⁾。通信使に対してもこぞって詩や書画を求めようとしたのであろう。朝鮮でも、詩や書に才のある者を派遣した。例えば、卞璞は従事官の騎船将であったが、詩や画にすぐれ、述斎や荊斎の号を用いて「題清見寺用前韻」という五言律詩を残している。寂巖に詩を贈った謙泉も軍官であった。あるいは英一蝶の作品に『朝鮮通信使小童図』があるが、小童に揮毫を求めるなど、当時の朝鮮では考えられなかった。これはあくまでも絵画世界の中における出来事であるが、明暦元（1655）年の第六回の通信使の従事官である南龍翼が著した『扶桑録』に所収されている「聞見別録」における「我が国の隻字片言を得れば、すなわち、宝蔵してこれを愛玩した。もっとも書法を喜び下輩の乱草たりとも相争って求め、屏風や軸物にしたものが多い」という記事を、すなわち日本人たちは位階の低い者に対してさえ詩や書画を求めたという記録が残っていることを想起させる。位階の低い者たちはあるいはその時限りの号を用いて⁽²⁴⁾、人々の求めに応じ、詩や書や画を残したのではないだろうか。

では、画そのものについて検討しよう。「倣米友仁筆法」と記されている。なるほど、北宋末の文人米芾に始まり南宋初めの米芾の子米友仁（1074-1153）に継承された文人墨戯の水墨山水画を米法山水というが、画風はこの米法山水を踏襲しているように思われる。たとえば、輪郭線を用いず山の大体の形や木の枝幹を墨のぼかしで作り、その上に墨の点を重ねて描きあげる米点と呼ばれる手法が認められる。また、とりわけ米友仁の山水画の特徴は、連なる遠山を背景に、叢樹、家屋、溪橋などの景物のすべてを雲烟の中に、淡い水墨墨を用いて次々と自在に表現した点にあるが、この点でも、本作品が米芾ではなくむしろ米友仁に影響を受けて制作されたことは明らかである。だが、米友仁の特徴は、単に朦朧とした印象にあるのではない。近景の水際の岸辺の描き方には、『遠岫晴雲図』（大阪市立美術館・阿部コレクション）に認められる「拖泥帶水皴」と呼ばれる皴法が用いられるが、これもまた重要な特徴の一つと考えられる。本作品には、この皴法が認められず、それゆえ米友仁の作品に比してア

クセントに乏しく、緊張感を欠く結果となっている。

また、通信使の画員として随行した崔北と金有声は、いずれも、李朝後期に『金剛山全図』（韓国・湖巖博物館蔵）などの真景山水図を描いてその名が知られる鄭叡（1676-1759）の影響を受け、鄭叡画法に基づく米法山水の手法を用いている⁽²⁵⁾。例えば、崔北においては、皴法（山と岩の描き方）と屋宇法（家屋の描き方）などが、謙斎画風（謙斎は鄭叡の号）に倣っている。これに対して、本作品を鄭叡の『観鵝』（光州博物館蔵）と比較してみると、皴法と屋宇法に鄭叡の影響を認めることは難しい。上述したように、本作品はあまりにも全体的に朦朧とし過ぎていているからである。

当時、朝鮮通信使はことあるごとに日本よりも朝鮮が文化的に上位に位置していることを示そうとした。鄭叡画法に基づく米法山水も、そうした自負の表われの一つであろう。本作品は、あえて米友仁を模倣している点、鄭叡の影響が認められない点で、いわゆる随行画員の作品とは性質を異にしている。寺伝を真と認めて本作品を朝鮮通信使の随行員の手による作品であるとするならば、正式に画を学んだ者ではなく、画を趣味とする者が残した作品だと思われる。なお、ブルクリント・ユングマンは朝鮮通信使の随行員に関して「武官でさえ施策の能力によって選拔され文学に熟達していることが求められていたし、書画は朝鮮国の使節たる重要な要件として両国政府によって合意された事項であった」⁽²⁶⁾と指摘している。本作品の作者も位階は低かったと思われるが、そうした者であってもある程度は書画の素養を有していたのである。

Ⅲ. 屏風「滕王閣序」——創造される歴史

宝島寺には、寂巖の時代に朝鮮通信使から贈られたものではないかと伝えられる、六曲一隻の屏風が残されている。しかし、この寺伝には大きな疑問が残る。まずは第一扇《図4》から引用しておこう。

第一扇

暢逸興遄飛睢園綠竹氣凌彭澤之



図4 屏風「滕王閣序」第一扇

尊鄴水朱華光照臨之筆爽籟發而
清風生織歌凝而白雲遏四美具二難并
窮睇眇於中天極娛遊於暇日天高地迥
覺宇宙之無窮興盡悲來識盈虛之

第二扇

有數望長安於日下指吳會於雲間地勢極
而南溟深天柱高而北辰遠關山難越誰
悲失路之人萍水相逢盡是他鄉之客懷
帝闈而不見奉宣室以何年嗟乎時運
不齊命途多舛馮唐易老李廣難逢

第三扇

屈賈誼於長沙非為聖主竄梁鴻於海曲豈
乏明時〔所〕賴君子安貧達人知命老當益
壯寧移白首之心窮且益堅不墜青雲之
志酌貪泉而覺爽處涸轍而猶懼北海雖賒
扶搖可接東隅已逝桑榆非晚孟嘗高潔

第四扇

空懷報國之情阮籍猖狂豈效窮途之哭
勃三尺微命一介書生無路請纓等終
軍之弱冠有懷投筆慕宗慤之長風舍
簪笏於百齡奉晨昏於萬里非謝家之寶
樹接孟氏之芳鄰他日趨庭叨陪鯉對今

第五扇

晨捧袂喜托龍門楊意不逢撫凌雲而
自惜鍾期既遇奏流水以何慚嗚呼勝地不
常盛筵難再蘭亭已矣梓澤丘墟臨
別贈言幸承恩於偉餞登高必賦是所望於群
公敢竭鄙誠恭疏短引一言均賦四韻俱成

第六扇

滕王高閣臨江渚佩玉鳴鸞罷歌舞畫
棟朝飛南浦雲珠簾暮捲西山雨閒
雲日悠々物換星移度秋閣中帝
子今何在檻外長江空自流潭影
崇禎二年己巳五月日志人松沙書



図5 屏風「滕王閣序」第六扇

なるほど、最終行に「崇禎二年己巳五月」の日付と「松沙」の号が見える《図5》。朝鮮では明の元号が用いられていたことは周知である。しかし、ここでは屏風の形式が問題となる。文章それ自体は王勃による『滕王閣序』を写したものである。以下に当該箇所をあげてみる⁽²⁷⁾。

遙吟俯暢 逸興遄飛 爽籟發而清風生 織歌凝而白雲遏 睢園綠竹 氣凌彭澤
 之樽 鄴水朱華 光照臨川之筆 四美具二難并 窮睇眇於中天 極娛遊於暇日
 天高地迥 覺宇宙之無窮 興盡悲來 識盈虛之有數 望長安於日下 指吳會於
 雲間 地勢極而南溟深 天柱高而北辰遠 關山難越 誰悲失路之人 萍水相逢
 盡是他鄉之客 懷帝閨而不見 奉宣室以何年 嗟乎 時運不齊 命途多舛 馮
 唐易老 李廣難封 屈賈諠於長沙 非無聖主 竄梁鴻於海曲 豈乏明時 所賴

君子安貧 達人知命 老當益壯 寧移白首之心 窮且益堅 不墜青雲之志 酌
貪泉而覺爽 處涸轍而猶懼 北海雖賒 夫搖可接 東隅已逝 桑榆非晚 孟嘗
高潔 空懷報國之情 阮籍猖狂 豈效窮途之哭 勃三尺微命一介書生 無路請
纓 等終軍之弱冠 有懷投筆 慕宗慤之長風 舍簪笏於百齡 奉晨昏於萬里
非謝家之寶樹 接孟氏之芳鄰 他日趨庭 叨陪鯉對 今晨捧袂 喜托龍門 楊
意不逢 撫凌雲而自惜 鍾期既遇 奏流水以何慚 嗚呼 勝地不常 盛筵難再
蘭亭已矣 梓澤邱墟 臨別贈言 幸承恩於偉錢 登高作賦 是所望於群公 敢
竭鄙誠 恭疏短引 一言均賦 四韻俱成 請灑潘江 各傾陸海云爾 滕王高閣
臨江渚 佩玉鳴鸞罷歌舞 畫棟朝飛南浦雲 珠簾暮捲西山雨 閒雲潭影日悠悠
物換星移幾度秋 閣中帝子今何在 檻外長江空自流

王勃の「宴序」のうちでは「滕王閣序」がもっとも名高く、『古文真宝』後集に収められ長く読み継がれている。ちなみに『古文真宝』はいわば家塾の教科書で、中国では元明の間に行われた。日本では室町から江戸にかけてよく読まれ、明治を経て今に至るまでなおも教材に取り上げられることが多い。また朝鮮でも広く流布していた。内容に関しても、「今日のこの美景と雅宴とを誠に得がたいものと思うのであるから、今これから別れるに当って、この文をこの宴の主人閻公に贈るわけであるが、幸いにこの宴は私に立派なはなむけの宴を賜わったことになり、御厚情に感謝する次第である」という意味が込められた、いわゆる留別詩であり、帰国の途にあった使臣が日本人に贈るものとしては適当ではある。

しかし、上述したように、宝島寺に伝わる屏風に関してはむしろ形式が問題となる。まず第一扇を見てみよう。原文と屏風を比較してまず不審に思うのは、その冒頭である。扇の文章は分節を無視して途中から始めている。また、一行目の「飛」のあとにくるべき「爽籟發而清風生 織歌凝而白雲遏」が二行目の「筆」のあとにくる。さらに二行目の第一字は「樽」であるべきところが「尊」になっている。また同じく二行目では「臨」のあとにくるべき「川」が脱落している。第二扇以降にもしばしば誤字脱字が見受けられる。また第六扇で

は、冒頭に来るべき「請灑潘江 各傾陸海云爾」が脱落し、三行目の「雲」の後の「潭影」が、最後に置かれる。

このように、宝島寺に伝わる屏風は、人に贈るにはあまりにも粗雑である。また、上述したように、寂巖は能書家としても著名である。とするならば、なおさら寂巖に対して贈与されたとは考えられない。さらに、崇禎2年すなわち1629年には朝鮮通信使は来日していない。可能性としては、第一に、後世に作られた全くの贋物ではないか、ということが疑われる。だが、贋物であるならむしろ、より精巧に製作したのではないだろうか。誤字脱字があるということ、あるいは元号の違いといった、あまりにも単純な誤りがむしろ、まったくの贋物ではないことの証左にはならないだろうか。何者かが、随行員が手慰みに書き散らしたものを入手し、屏風に仕立てて宝島寺に寄進した、とも考えられる。実際、使臣の詩や書を求めて多くの人々が宿館に押し寄せたことは、申維翰の『海游録』における「大阪求文求者倍劇於諸路或至鷄鳴不寝當饋吐哺酬應之勞如此」⁽²⁸⁾という記事から見て取ることができる⁽²⁹⁾。この屏風は、なんとかして朝鮮通信使一行の手跡を入手したいという、庶民の願望の象徴として作り出されたものなのではないだろうか。

宝島寺に伝わる朝鮮通信使にまつわる遺物のうち、扁額はおそらく金啓升が残したものに間違いのないだろう。しかし、『雲山煙雨』と題された画と『滕王閣序』の屏風に関して、真贋を見極めることはできなかった。しかし、万が一贋作であったとしても、こうした作品が作られ、また先述したような来歴とともに保存されているということには、朝鮮通信使に対する日本人々の態度が象徴されている。まさしく歴史を創り出そうという気持ちの表れなのである。

おわりに

宝島寺には『停棹邂逅録』《図6》と題された、筆談集も残されている。寛延度の使臣であった朴敬行、李鳳煥、李命啓と岡山藩の儒者近藤篤とによるものである。これもまた貴重な資料であるが、本稿では紙幅の都合上取り上げる

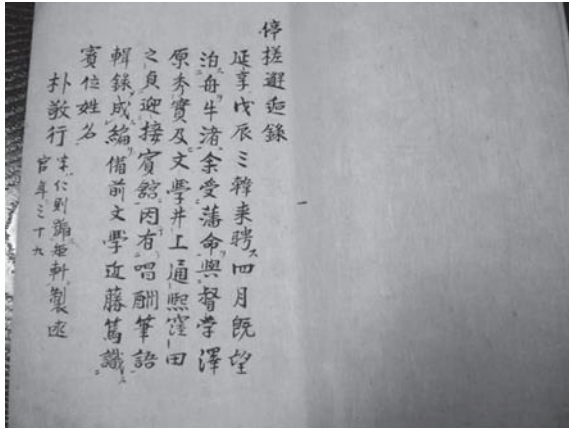


図6 『停棧邂逅録』(部分)

ことをせず、紹介するにとどめる。

すでに指摘したが、朝鮮通信使が残した墨跡などは、それと知られないまま放置されている可能性もある。一つには、自然に風化したためである。著名でない随行員が残した墨跡は確認のしようがない。しかし、もう一つの理由として歴史をあるいは抹消しあるいは変容させようとした過去があったことを忘れてはならない。牛窓において、「唐子踊」は神功皇后伝説に結び付けられ、また本蓮寺に残された遺物は破損の危機を迎えたことがあった。こうした事柄を忘れてはならない。なぜなら、こうした事柄もまた「歴史」の一つであり、歴史の重層性のあらわれだと言えるからである。

しばしば言われることであるが、歴史すなわち history の原義は「物語る」ことである。日朝間の歴史もまた、ときに創造され、変容され、あるいは抹消されてきた。こうしたことそれ自体が、日本と朝鮮とのつながりの深さ、長さを象徴しているとは言える。朝鮮通信使研究においても、歴史を抹消するという轍を踏むことなく、すなわち日朝間の軋轢や摩擦といった負の側面を無視するのではなく、むしろ反面教師として、様々な逸話や遺物を発掘し保存することに努めなくてはならない。

我々に残された課題は、例えば「唐子踊」を神功皇后伝説と結び付けてきた歴史を無視することではなく、それらを一つ一つ検証して歴史的文脈の中に位置づけ直すことである。一度変容されたり抹消されたりした歴史を掘り起こす作業は困難ではあるものの、通信使に関連する逸話や絵画などの資料をまずは発掘し、そして一つ一つ紐解いていかななくてはならないのである。

註

- (1) この「唐人踊」は岡山藩が大洪水に見舞われた承応3（1653）年に町方練物それ自体の中止を受けて中断される。町方練物は元禄12（1699）年に復活するが「唐人踊」は含まれていなかった。その後の正徳元（1711）年に「布袋車ヲ唐人引、唐子踊」との記事が見られる。この年は約三十年ぶりに朝鮮通信使が派遣された年にあたり、やはりこの「唐子踊」が通信使を意識したものであることが見て取れる。谷口澄夫編『岡山県の歴史』ぎょうせい、1997年、253頁、参照。
- (2) 『池田家履略記』には、寛永20（1643）年の通信使に関して「十二月二十二日朝鮮人備前海上に至り此度は牛窓には着せず下津井に泊して二十四日同所を出帆せり」との記述がある。小林久麿雄、『邑久郡誌 第一編』、名著出版、1973年、第一編、第三章「近世紀」、第三節「朝鮮使節」、参照。
- (3) 古代吉備地方には百済の王子と称する温羅という鬼が住んでおり、鬼ノ城を拠点にこの地方を支配し悪行を行っていた。吉備の人々は都へ出向いて窮状を訴えたため、これを救うべく崇神天皇は孝霊天皇の子で四道將軍の吉備津彦命を派遣して温羅を討った。温羅は製鉄技術をもたらし吉備を治めた百済系の技術者であり豪族ではないかと考えられている。吉備地方は古くから鉄の産地として知られ、実際に鬼ノ城の東麓には日本最古級の製鉄遺跡が存在する。西川宏、『岡山文庫 岡山と朝鮮』、日本文教出版株式会社、1982年、参照。
- (4) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注『新編 日本古典文学全集3 日本書紀②』小学館、1996年、参照。
- (5) 従来の朝鮮通信使研究ではあまり取り上げられてこなかった逸話、すなわち当時の日朝間の確執や軋轢などの負の側面が、刈屋栄昌著「朝鮮使節接待の裏話」〔『牛窓夜話（後編）』、牛窓郷土研究会、1967年）に収載されている。参照された。
- (6) たとえば『歴史散歩 鞆の浦今昔』（山陽新聞社、1996年、106頁）には、「稚児舞として奉納されるその踊り〔牛窓の「唐子踊」〕は、李氏朝鮮時代の服によく似たあでやかな衣装を身につけ、同町の疫神社の秋祭りで披露される」と紹介されている。

- (7) 岡山県教育委員会、『岡山県の文化財（三）』、1982年、116頁、参照。
- (8) 武田祐吉校註、『日本古典全書「日本書紀一」』、朝日新聞社、1948年。
- (9) 李萬烈、「近現代韓日関係研究史——日本人の韓国史研究を中心に、『日韓歴史共同研究委員会報告書 第一期（2002-2005）』、（財）日韓文化交流基金、参照。事実、伴蒿蹊（1733-180）は『閑田耕筆』において、「朝鮮国初の主を檀君といふ。これ素盞烏尊にておはしますと、対馬にての話なりとなん。其素尊の朝鮮へ渡り給ひしといへる所、対馬の西北にて飛前と名号。又神功皇后、朝鮮を帰化せしめて、対馬より九州へ帰船まします所も、飛前といふ。これは国の南なりとぞ。〔割註〕私按、素尊一旦新羅へ渡たまひしといふことは、神代紀中一書の説に見えたり」と論じている（引用は、『日本随筆大成 第一期 第十八巻』、吉川弘文館、p 172による）。
- (10) 全浩天、『朝鮮からみた古代日本』、未来社、1989年、参照。なお、小林久麿雄の前掲書には「一説に神功皇后凱旋されける時、従ひ来りし新羅人をここに住はせ給ひしものとも云へり」（210頁）という記述もある。
- (11) 王仁に関しては日本の『日本書紀』や『古事記』には記述があるが、朝鮮の『三国史記』や『三国遺事』には記述がない。しかし、申維翰が『海游録』の中で言及するなど、通信使の時代にはすでに朝鮮でも存在を知られていた。西村白鳥輯・林自見校『煙霞綺談』には「先年朝鮮人來聘の時、江戸にてある医師扇を出して、何にても書くれよとたのみければ、難波津に咲や此はな冬ごもり今を春部とさくやこのはな といふ王仁が歌を書てくれたり。医師とりあへず、なには津に書や此仮名風かはり今は唐にもかくや此仮名 朝鮮人感心せしといへり」という記述もある（引用は『日本随筆大成 第一期 第四巻』、吉川弘文館、p226による）。王仁に関しては、当時の朝鮮が日本の記録を利用して朝鮮の文化的優位を説こうとした事例である。こうした事例からも日朝両国の関係の深さ、歴史の重層性を垣間見ることができる。
- (12) 連島町誌編纂会、『連島町誌』、1956年、参照。
- (13) 倉敷市史研究会、『新修倉敷市史第二巻 古代・中世』、山陽新聞社、2000年、参照。
- (14) これらの出土品は倉敷埋蔵文化財センターに保管されている。なお、ここに記した情報は倉敷埋蔵文化財センターの藤原好二氏からいただいた回答に基づいている。氏のご好意に謝意を表したい。
- (15) 倉敷市史研究会、『新修倉敷市史 第二巻 古代・中世』、山陽新聞社、2000年、参照。
- (16) 矢上山宝島寺、『寂巖和上著作集 第一集』、1987年、および連島町誌編纂会、『連島町誌』、1956年、参照。
- (17) 渡辺知水、『僧寂巖』、1933年、所収。
- (18) 謙泉の名は、宝暦14（1764）年の通信使の中に確認できる。正使に所属する軍

官の「前康翎県監」の李海文が字を孟器、号を謙泉といった。李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997年。

- (19) 「東華」という呼称に関しては、日本ではしばしば問題にされた。中山高陽は『画譚鷄肋』の中で「朝鮮人来聘のとき、書画詩文題名の上に、東華あるひは小華と書す。是は清は夷人なれば、中華は朝鮮と云ふことゝかや。然るに古より、中国人も中華某とはかゝず、わらふべし」と記述している（引用は『日本随筆大成 第一期 第四巻』、吉川弘文館、p179による）。なお、渡辺知水の『僧寂巖』に収載された朝鮮通信使を批判するこの文章と、連島町誌編纂会『連島町誌』（324頁）に引用された荻生徂徠を批判する「天狗電論」では、「所以余之憤々不得已、非如仗徒之代人報怨、欲使彼暴惡之情状、不蔓延、可畏人、知之、厭如瘡疥、掃如塵芥」の部分が完全に重複していることは、色々な意味で興味深い。より詳しい調査が必要ではないか。
- (20) 『古画備考』の「朝鮮書画伝」に「朝鮮国居其斎崔七七写 山居図賛金啓升」の記事がある。李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997年、320頁、参照。
- (21) 李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版、1997年、565頁。
- (22) 同上、631頁
- (23) 山崎美成は『提酬紀談』において「彼邦の墨も佳品なれども、筆は狸毛にて最よろし、然れども多く獲がたし」と述べている（引用は、『日本随筆大成 第二期 第二巻』、吉川弘文館、p172による）。また、暁晴翁は『雲錦隨筆』において「片面鼓は朝鮮の器にして唐物の骨董舖には間有て珍しからずといへども、因によりて此に出せり」（傍点引用者）と述べている（引用は、『日本随筆大成 第一期 第三巻』、吉川弘文館、p110による）。また、外国の器物に示す日本人の関心の高さについては、幕末期に駐日スイス代表であったエメュー・アンペールは「私は、日本の市場で、ヨーロッパの空瓶がどんどん売れていくのを何度となく見た。（中略）日本人はまた銅版画も珍しがって高く買い、アブサンヤリキュールの瓶のレットルが、二倍の値で売っていた」と記録している（引用は茂森唯士訳『絵で見る幕末日本』、講談社学術文庫、2004年、p53による）。
- (24) プルクリント・ユングマンは「特に十六世紀においては儒教に由来する美術を蔑視する風潮から、朝鮮の文人畫家たちは自己の名前を隠すことを餘儀なくされたし、宮廷畫家たちも社会的地位は極低いが故に名前を記録するに値しないものとされていた」と指摘している。いずれにせよ、当時の朝鮮においては本名を表わさないのが通例であった。プルクリント・ユングマン（上垣外憲一訳）、「日本南画の形成における朝鮮通信使の役割」、『国華』1240号、国華社、2000年、8頁。
- (25) 許英桓（裴康煥訳）、「画家崔北（雅号毫生館）」、『コリア評論』285号、コリア評論社、1986年、および郷司泰仁、「宝曆度朝鮮通信使の画員金有聲について」、『青丘学術論集』23号、韓国文化研究振興財団、2003年、参照。
- (26) 前掲論文、6-7頁。

- (27) なお、引用に際しては、分節を含めて星川清孝『新釈漢文大系 古文真宝』（明治書院，1963年）を参照した。
- (28) 『海游録』，1719年9月初4日癸酉。
- (29) 同様に、奥州に漂着した清の漁民たちに対して、実際には彼らが文字を知らないにもかかわらず、多くの人々が墨跡や詩を求めた。そのため世話役の儒者志村藤蔵が漁民たちに文字と詩を教え、人々の求めに応じさせた、という逸話も橘春暉の『北窓瑣談』に記載されている。

本稿は平成18-19年度科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））の研究成果の一部である。本稿の執筆に当たっては堤啓次郎氏（西南学院大学）と長迫英倫氏（韓国・蔚山大学校）の協力を得た。末筆ながらここに謝意を表したい。